

分野 (3) 気管支ぜん息の動向等に関する調査研究

研究課題名 : 気管支ぜん息患者の予後と変動要因に関する調査研究

申請課題名 : 気管支喘息患者の予後と変動要因に関する調査研究

調査研究代表者氏名 : 谷口 正実

評価コメント

- ・予後等につき種々の情報が得られる貴重な調査研究である。
- ・レセプト情報やメタボ検診データなど大規模コホート研究は独自性が高い。
- ・小児ではこの種の研究では回収率が落ちるのがふつうであるが60%台を保っているのは努力のおかげと評したい。
- ・小児喘息例のコホートも6年目までのデータが解析可能になったことは有意義である。
- ・小児喘息部門の治療内容の経時変化に関する調査は、各種の抗喘息薬の位置づけを正確によく捉えており興味あるデータであった。
- ・成人喘息では、レセプト調査の信頼性が明らかになり、薬剤使用状況、有病率などの経年変化の他に、発症・増悪因子も種々新しい因子が明らかになってきた。
- ・成人喘息で内臓肥満が喘息のリスクファクターになることを明らかにしたことは一つの成果である。
- ・成人についてはメタボ健診からのデータで特に肥満との関連が明らかになった。
- ・肥満度(BMI)が気管支喘息(特に難治性喘息)に及ぼす影響は世界的に注目されているが、本邦での大規模調査は少なく、本研究の成果は有用性が高い。
- ・抗原回避に関する調査も、これを実行することが如何に困難かを示唆している。
- ・我が国では、初めての喘息長期予後調査システムであり、今後の長期のデータ蓄積により、寛解、増悪の実態や種々の予後因子が明らかになることが期待できる。
- ・喘鳴児の経時観察が行われ、また副次的観察も成果が出てきている。今後の努力を期待したい。
- ・本研究は長年に亘ってフォローアップすることにより、より意義が明らかになると考える。
- ・喘息群からの喘息発症に関する調査研究成果から、JPGLの乳児喘息診断基準をもっと厳密にしたほうが良いことが示唆される。6年目で治療加味重症度の著しい改善が認められたが、寛解がないのは一般地域の調査とやや異なる。
- ・各々の年度に種々の副次的検討項目を入れることが必要ではないか。

- 継続的な研究として位置付けられる性格のものである。
- 小児の6年目までのコホート追跡により、一定の成果が得られつつあるが、コホートの継続を以下に保っていくかが今後の課題となろう。
- 毎年同じ様な調査では新鮮味に欠ける。一考も二考もして御検討ありたい。
- 小児喘息では、報告内容がややマンネリ化している感がある。今後は、成人部門のような横断的な因子分析等も取り入れてはどうか。
- 成人に対しては、新たに前向きコホートとして利用できるデータを得ることができたので、これからこの集団を用いてどのような情報が得られるか、もう一度検討を行って欲しい。
- 肥満細胞からのサイトカインについても研究されており今後のさらなる発展が望まれる。